

幼小接続期における思考と協同性に関する研究

人間教育専攻

幼年発達支援コース

倉野晴代

指導教員 塩路晶子

1. 問題の所在と研究の目的

幼児教育と小学校教育との学びの連続性や教育理念の一貫性については、長年の重要課題である。学校現場でも、幼小連携活動や幼小接続期のカリキュラム作成、合同研修など幼小の相互理解の工夫が進む一方で、幼小間での教育環境や教育観に見られる学びの見方や考え方の違い、教育方法の違いによる相互理解の難しさなど、課題は残されている。子どもの生活の適応指導としての接続や連続性のみならず、子どもの内面の育ち・学びの連続性について、子どもの思考や協同的な学びへの視点も大切なのではないだろうか。

先行研究から、幼児期の子どもの思考力の発達について、内田・津金(2014)や藤谷(2016)、佐藤(2018)により、幼児期の子どもがもの・こととかわかり、論理的な思考力の芽生えが見られること、思考過程で人とのかわかりがとても重要な働きをしていることが示されている。また、幼小接続期の子どもたちに関して、塩野入(2017)は生活的概念と科学的概念をつなぐ学びについて、無藤(2013)は、協同性の育ちによる学びの高まりについて述べている。本研究では、第一に幼小接続期の思考の過程における協同性について明らかにすること、第二に幼小接続期の子どもの思考の内容や思考の方法と協同性について探り、その具体的様相を見い出すことを目的とする。

2. 研究の方法

研究 I では、鳴門教育大学附属幼稚園研究紀要

第 45 集(2011)と同園紀要第 47 集(2013)、佐々木(2004)『なめらかな幼小の連携教育 その実践とモデルカリキュラム』から、幼小接続期(5歳児9月～小学1年生7月)の子どもの思考が読み取れる 19 事例について、事例分析を行う。「子どもの気付く・考える・表現する姿」と「協同性につながる姿」の2つの視点から、佐藤(2008)のコーディングの方法により分析する。「協同性につながる姿」の焦点的コーディングを行い、「協同性」のカテゴリー化を図る。

研究 II では、研究 I を補完するため対象を広げ、参与観察によるエピソード記録の収集を幼稚園 2 園(X 県 A 幼稚園 2 クラス、Y 県 B 幼稚園 2 クラス、2018 年 9 月～2019 年 3 月の週 1 回ずつ)と小学校 1 校(Y 県 C 小学校 3 クラス、2019 年 4 月～7 月の週 2 回)で実施する。分析方法は、研究 I と同様に行い、子どもの「思考の内容」「思考の方法」「協同性」について、明らかにする。

3. 研究 I

1) 協同性カテゴリー

「協同性につながる姿」の焦点的コーディングで抽出した 220 個のコードを分析し、38 の小カテゴリーと 8 つの大カテゴリー「I 関心をもつ」、「II 一緒にかかわり合う」、「III 感じ合う・共感する」、「IV イメージや考えを共有する」、「V 自分の思いや考えを伝える」、「VI 提案する」、「VII 仲間意識を高めて関係性を広げる」、「VIII 多様なつながりをもつ」にまとめた。これらのカテゴリーは、互

いに関連しており、友達、またもの・ことへの関心をもとに情動の共有が生まれ、イメージや考えを言葉により共有することを通して、願いや目的が生じて実現に向かう方向性があると考え。

2) 思考の内容

19 事例の「子どもの気付く・考える・表現する姿」の焦点的コーディングから、子どもの思考の内容として、(1) 自然や自然現象、(2) 自然物などのものの生かし方、(3) 生き物、(4) 抽象的な規則性、構成など、(5) 生活の知恵、(6) 目に見えないものの想像に関する内容を見出した。

3) 思考の方法

各事例の思考方法の分析から、(1) 体験知と事実をつなぎ合わせる、(2) イメージを具体化する・まねる、(3) 分類する、(4) 試すー比較する、(5) 試すー予測する/推測する、(6) 規則性を使って考える、(7) 新しい考えや方法を取り入れ、組み合わせる、という方法の分類ができた。

4. 研究Ⅱ

1) 思考の内容

研究Ⅰの(1)から(6)の観点をもとに、51 事例の分析結果、研究Ⅰには見られなかった思考の内容(7)ルール(8)道徳性の観点が明らかになった。

2) 思考の方法

51 事例の分析結果、研究Ⅰの思考の方法に、(8)部分と全体から考える方法を新たに加えた。

5. 総合考察

「協同性カテゴリー」は、幼小接続期の子どもが人とかかわり、考え学ぶ姿を明らかにした。関心をもつことに始まり、一緒に行う中で、共感や共有をして、思いや考えを伝え合い、互いの考えを広げ深める。一人ではなく、仲間意識をもって、もの・ことについて追究していく子どもの協同性の具体的な姿がとらえられた。

「思考の内容」は、身近で具体的なもの・こと

についての好奇心や関心から、抽象的なもの・ことについて、思いや考えを働かせていることがわかった。自然や自然現象は、子どもに不思議さや疑問を働きかける一方、かかわりが自由で柔軟である応答的なやりとりを通して考えられるため、子どもにとって魅力あるもの・ことであると考えられた。また、自然や身近なものなどを通しての規則性への気付きや知恵について、子どもは関心をもち思考する過程で自分なりにもの・ことの真理を追究している。目に見えないものを想像することで時空間を超えた思考や、ルールや道徳性など人とかかわる社会性についての思考もなされていることがわかった。その際、「思考の方法」として、自分に引きつけて考えることが、幼小接続期の子どもたちの思考の方法の基盤にあると考える。体験知や具体的イメージを生かす、まねるなど諸感覚を十分に働かせた思考方法を取る。その基盤の上で抽象的にもの・ことを見つめる分類、比較、予測、推測、規則性の発見、考えの組み合わせ、部分と全体と関係性など、複雑な思考方法も取り入れ、思考を広げ深めている。

幼小接続期の子どもは、互いの思いや考えを知ったり認め合ったりすることで、目的や願いの実現に向かおうとする。「思考と協同性」が絡み合っ、子どもの学びがつけられている。

幼小接続期の思考と協同性の発達について、本研究では共通性が見られたが大きな違いは見い出せていない。子どもが思考と協同性を相互に高め合う思考過程(思考内容・方法)とその環境について、さらに検討していきたい。

引用文献

- 藤谷智子(2016)、「幼児期の協同性の発達における論理的思考-5歳児の発達過程に着目して-」、『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)』,第64巻, pp.31-39.
- 無藤隆(2013)、「第8章 協同性を育てる」、『幼児教育のデザイン 保育の生態学』,東京大学出版会, pp.173-202.
- 佐藤郁哉(2008)、『質的データ分析法 原理・方法・実践』,新曜社, pp.91-109.
- 佐藤康富(2018)、「幼児期における思考力の深化過程に関する研究」、『鎌倉女子大学紀要』,第25巻, pp.89-99.
- 塩野入愛(2016)、「幼小接続期における生活的概念と科学的概念の発達」、『子ども学研究紀要』,第4号, pp.57-66.
- 内田伸子・津金美智子(2014)、「乳幼児の論理的思考の発達に関する研究-自発的活動としての遊びを通して論理的思考の思考力が育まれる-」、『保育科学研究』,第5巻, pp.131-139.